

派遣先所属 福島県相双建設事務所

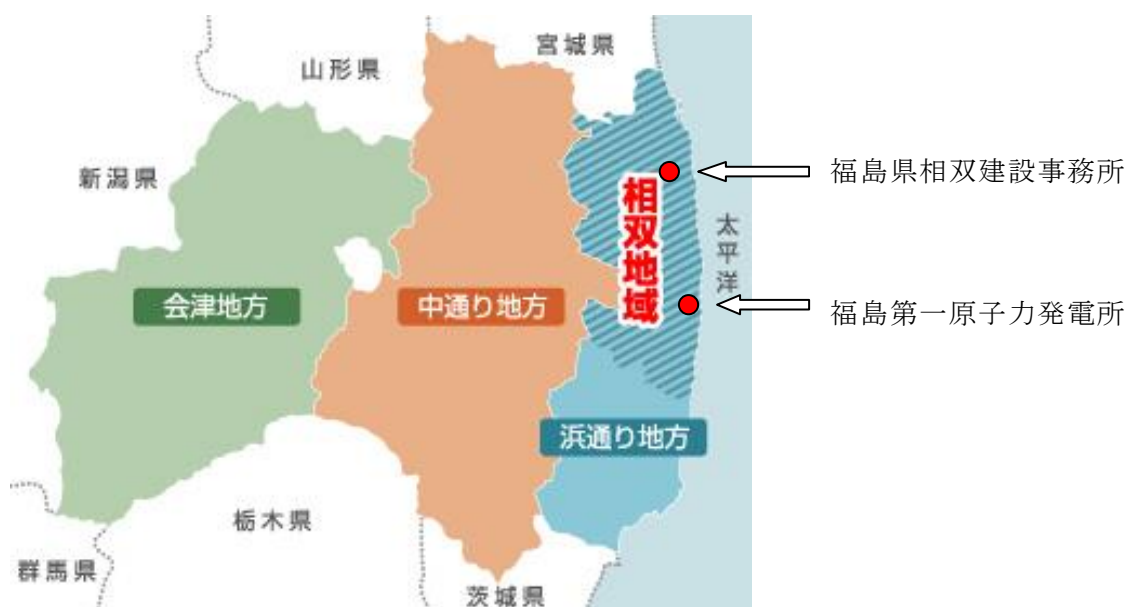
氏 名 大谷 史郎（おおたに しろう）、石渡 保（いしわたり たもつ）

派遣期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日

1 派遣業務の内容、現況

派遣先事務所は福島県浜通り地方の相双地域2市7町3村を管轄しており、私たちはそこで復旧・復興に関する業務を行っています。具体的には、東日本大震災で損壊した道路、海岸、河川の原形復旧や災害に強い施設整備をするための事業用地を取得する業務です。

震災から3年半が過ぎましたが、県全体として、事業規模に比べて用地取得業務を行う職員、特に同業務経験者が不足しているとのこと。また、管内には福島第一原子力発電所があり、同原発事故の影響を色濃く受け、未だに事業が始められない箇所も多いことから、今後も継続した支援が必要と思われま



派遣先事務所の配属先は、復旧・復興のために平成24年度に新設された用地第二課で、私たちはそれぞれ相馬市、新地町の沿岸部道路、河川、防災緑地の公共用地取得を担当しています。当課には私たちの他に、山梨県から職員が1名派遣されています。

当所には、私たち用地第二課の3人以外では、他県から11人の土木職職員（愛知県、滋賀県、岡山県、島根県、長崎県）が応援職員として派遣されています。年齢的には、20代半ばから30代の人が多く、ほぼ全員が応援職員用の公舎（一部屋）

家具家電付き)に住んでおり、週末にはどこかの部屋で宴会が始まっています。

派遣前は、相続調査が膨大な量で、その業務に追われるのではないかと予想していましたが、確かにその業務量が多いものの、それらの業務を行う職員も7名配置されており、また、県司法書士協会に業務委託する等の制度もあるため、着任当初から私たちは、地権者さんとの交渉業務が主たる業務となっています。

業務の性質上、被災された方と直接話をする事が多く、その意味で交渉には神経を使いますが、それらの方々の話に耳を傾け、震災の傷が少しでも和らぐように誠意を持って業務を行うことを心がけています。目の前で家を流され、家族を亡くされ、時間も止まったままのような地権者さんが、交渉を重ねるに従って前向きな気持ちに変わっていく様子を見ると、私たちも被災者支援の一端を担っているのだと実感します。

派遣先事務所の業務は、復旧・復興現場の最前線であるため予算規模も大きく、現在多忙を極めている工事担当課もありますが、それは時期的な要素が強いとのことで、全体的には落ち着いているように見えます。



(相馬市(左)と新地町のそれぞれ防災緑地公園事業予定地。元々はどちらも集落だった場所ですが、被災によりほとんどの家屋が全壊等したため、跡地を取得して事業を行っています。)

2 復旧・復興状況や被災地での見聞・感想

派遣先事務所も住んでいる公舎も福島県南相馬市にあります。派遣前によくマスコミに取り上げられていると感じていましたが、実際住んでみての感想を述べます。

仮設住宅

地域のあちらこちらに点在しており、住んでいる方も想像以上に多いです。交渉で訪問することもよくあります。まだ10数万人の県民の方が避難中とのことで、復旧・復興への道のりはまだまだ遠いと思われれます。

店が休店等している

建物はそのままの状態です。休店中の店舗（ハンバーガー店やスポーツ店等）が見受けられます。理由は定かではありませんが、パート従業員さんが集まらないことが原因ではないかと言われていました。また、営業時間が震災前より短縮されている店舗も多いようです。

小さいお子さんと若い女性が少ない

町の中で見かけることが少ないと感じます。同市は震災前から3～4割の人口が減っているとのことなので、避難先から戻って来ていないのでしょうか。スーパーの食料品コーナーで多く見かけるのは、土木工事や除染作業でこちらに来ていていると思われる作業服姿の男性です。

お酒、食べ物が美味しい

福島県は、日本屈指の酒どころです。スーパーで美味しい地元の日本酒が買えたりします。お米、魚介類も美味しいです。ほっき飯というほっき貝を使用した料理がありますが、こちらに来て初めて食べました。地元では家庭料理とのことですが、とても美味しいです。

3 最後に

住んでいる公舎も事務所も放射線量は高くないのですが、やはり風評被害は相当なもので、漁業関係の方々を始め、地域の皆さんはそれに苦しんでいます。

こちらでは、福島県職員の方々にはとても良くしていただき感謝しています。また、地権者の方からも「埼玉県から来ている。」と自己紹介すると、「遠いところからご苦労様。」とねぎらいの言葉をかけてくださったり、「震災当時はお世話になりました。」とのお礼の言葉をいただいたりもします。

まずは、埼玉県民一人一人の意識から、福島県の風評を取り除いていくことが重要ではないかと感じています。今後、復旧・復興のための一助となるべく、更なる努力をしていきたいと思っております。